



# 八幡商人と歴史民俗資料

## はじめに

近江商人のふるさとといえば、今の五個荘町、日野町、愛知川町、そして近江八幡市があげられますが、近江という国は、東海道・中山道・北陸道など日本の大動脈としての重要な道路が昔から通っており、我が国の文化・経済等あらゆる事柄が、東から西へ、北から南へ、また逆にはげしいばかりに行き交うところに位置しており、近江の人々はこのいろいろな出来事や、渦中にまきこまれながら、きびしい目で世の移り変わりをみつめ、やがてはそれらの中から自分自身の生きる道を見つけて自分の物として消化し、少しずつ基盤

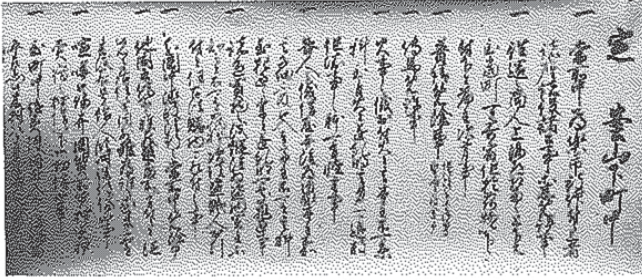
づくりをして、やがては日本の経済界の中にあって重要な役割をし、近江商人としての活躍をしたものです。誰かが、「近江は文化の回廊である」といわれたが、まさにその言葉通りで、こうした流れの中から、強くたくましい近江商人が生まれたものです。

## 八幡堀

近江八幡は、天正13年（1585）に豊臣秀次によって開町されました。隣接する安土の城下町を開いた織田信長が、町の人々にだした「安土山下町掟」という現在の町条令に相当するものがありますが、豊臣秀次も同じように八幡の町の人達に、「八幡山下町掟」をだ



八幡堀



しています。その中の条例を安土のものとは比べて見ますと、八幡には、八幡堀をほって、琵琶湖をゆききするすべての船はこの運河を利用して、八幡の町に寄航するように定められていることが、安土のものには書かれていない新しい条文であり、陸上交通だけではなく、湖の交通まで八幡発展のための方法としてとり入れたことがよくわかります。

陸上にあっては、中山道・朝鮮人街道、そして蒲生平野を伊勢に向かってつらぬく八幡街道等によって、このあたり一帯の生産物資が八幡に集まり、運河である八幡堀を通して琵琶湖より県内各地はもとより県外まで運びだされました。また湖上からは北陸よりの産物をつんだ船が塩津・今津からこの八幡へ立ち寄り京都へ、そして京都・大阪からの物資は、大津・堅田等の港より八幡を経て今津・塩津などで陸揚げされて、北陸へと運ばれていったものです。

### 異色の商人

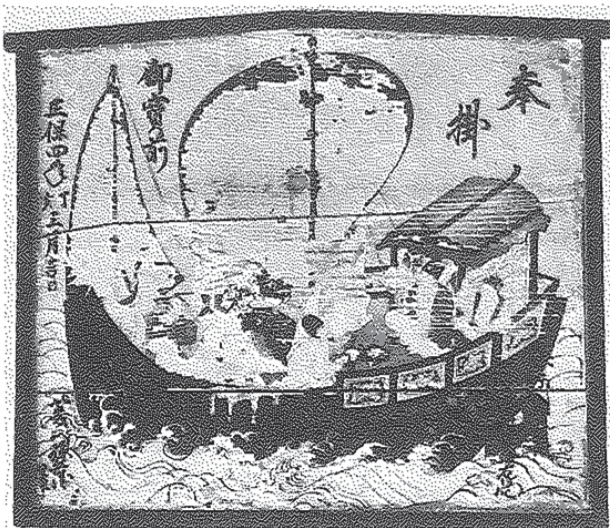
安南屋西村太郎右衛門という人物は、数多

←安土山下町掟

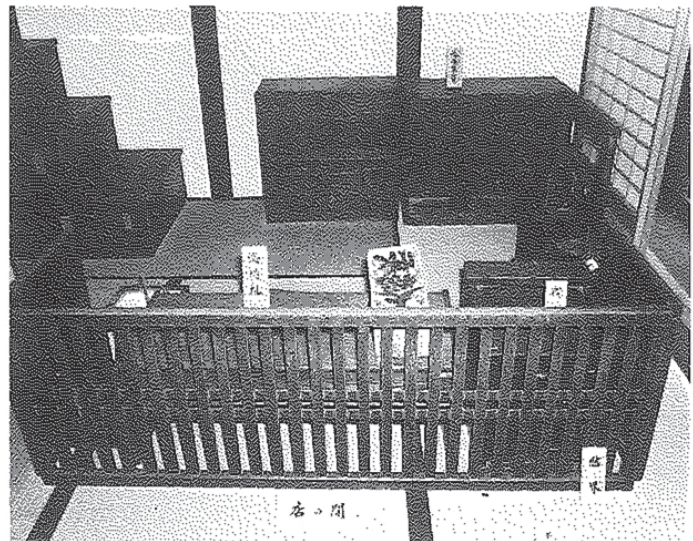
↑八幡山下町掟

い八幡商人の中での先覚者であり、かつ異色な存在として知られています。彼は外国貿易（安南—現在のベトナム）に従事した人で、はじめ綿屋とっていた屋号まで安南屋とあらためるほど、活発に貿易に従事したのですが、残念なことに、寛永12年（1635）の鎖国令によって、日本に帰ることが出来なくなりました。仕方なく望郷の念を一枚の絵馬に托して日本を去り、慶安4年（1651）に異国でさびしくなくなってしまいました。今、八幡神社にのこされている国の重要文化財「安南渡海船額」は、当時の彼の雄姿を示す中で望郷の一念を表現しているものです。

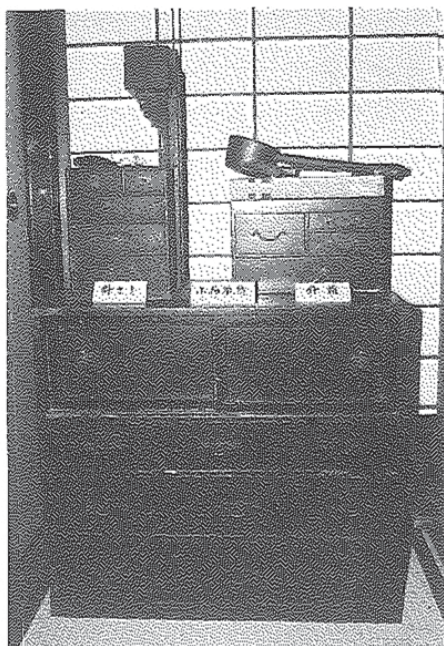
もう一人、シャム口屋勤兵衛という人がいて、今のタイ国と貿易をしたとされていますが、彼もまた海外に雄飛した一人です。しかし残念ながら彼の詳しい経歴はわからず、町の人々からは忘れ去られようとしています。大変悲しいことですが、いずれにしても知られる人よりも忘れ去られる人々の方がはるかに多く、そしてこの忘れさられる人々によ



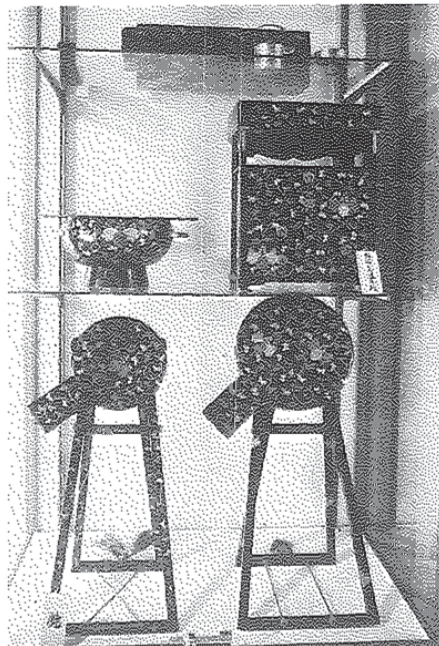
安南渡海船額



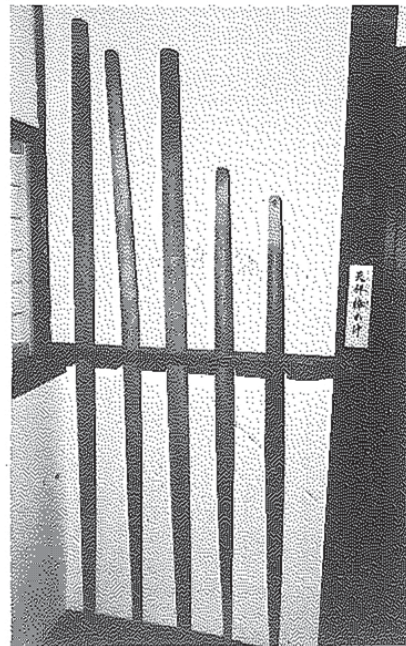
帳場の再現



小物箆筒



蒔絵道具



天秤棒かけ

て支えられているのが、知られる人達であることもまた、わびしい事実なのです。

このことは単に人間の世界だけに限られたものではなく、私達の日常生活を支えてくれるあらゆる物もこのような同じ運命にあるものなのです。

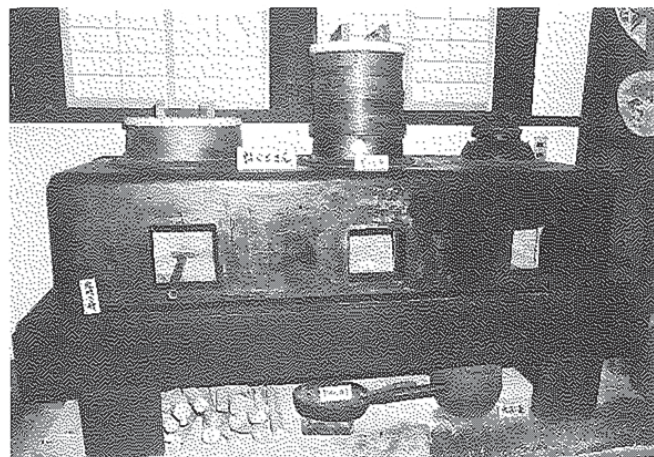
### 近江商人と歴史民俗資料館

54年3月1日に開館された市立歴史民俗資料館は、八幡商人のふるさととしての特徴をもった資料館であり、江戸末期の商人の家を復元して、かつて彼等が使用した商売道具、事務用品、日用品、台所用品等々数多くの先人の遺産を、それぞれの部屋に調和した展示をしています。これ等の品々の中には、かつ

ての商人達の活躍がしのばれる帳場の再現、行商用の小物類、また一方では商人の財力の豊かさを示す豪華な蒔絵の道具類、そして当時の婦人達が日常使った針箱や小物入れなどが残されていて、往時の八幡商人の生活振りが目のあたりにしのべられます。部屋の柱にかけられている時計のコチコチと動く音を聞いていますと、今にも「ご免やす」と声をかけて人が入ってくるような感じがします。針箱や裁縫箱の中を見ますと、今日ならば捨ててしまうような糸くずまでがしまっており、ちょっとしたつくろいものに使うための心くばりがされ、見事なまでの蒔絵をほどこした化粧道具とは全く縁のないもののように思われ



針箱の中



おくどさん



歴史民俗資料館

ますが、このような中に商人の家族として、物を大切に作る心構えが、ひしひしと感じられ、一方では、立派な道具を日常生活の中で使いこなす教養を身につけていたこともうかがうことができます。更に、使い古した和紙を何枚も重ね合わせて輪にし、外側を柄のついた端布はたのでくるんだ指抜きもまた、こうした生活の智恵であろうと思います。

#### 近江商人の心いき

展示されている華麗な調度品を見学した人の中に、「八幡商人は大変なぜいたくをしたものですねえ」と言われる方がありますが、それはぜいたくをしたのではなく、彼等が少しずつ財をなし、大商人となって行くにしたがって身分に応じた教養としての物を見る目を養うことが、商人としての大切なことであり、ただ、金もうけだけに心をうばわれる事なく、文化を理解する事の重要性を彼等は認識し、日常生活の中に儉約の精神と共に両立させていたのです。近江商人としての名声を残したのも、元もとはと言えば、天秤棒一本から生まれて来たものです。「千両天秤」と評されるのもこのことからで、商家へ丁稚奉公にでるとまず初めに、「天秤棒番」と呼ばれる役があたえられ、商人の魂である天秤棒がおかれている所を、いつもきれいにして、先人の苦勞を忘れないようにしたものです。近江商

人根性というのも、このような若い時から精神的修養のつみかさねの中から生まれてきたものと思われます。また一冊の「金銭出入帳」を見てみますと、上は千何百両という大きな金額の出入りから、下は丁稚・小僧に渡した20文・50文という小額の小づかい銭までが、同じ帳面に記入されており、金銭の出入りをいかに正確にしたか、まさに商人ならではの心構えがうかがわれます。

このように当時の商人達が残した一つ一つの品々が、無言の中から語りかけてくれる歴史の物語りは、私達が、ふるさとの先人の歩みとして心静かに耳をかたむけ、その歴史を語りかけてくれる品々の保存に心掛けなければならないと考えます。このことが、民俗資料を保存することの大切な事柄だと思います。

#### おわりに

近年、ふるさとの再発見とか、ふるさとを見なおそうとする国民的感情がたかまり、むずかしい言葉では、「伝統的建造物群保存事業」といわれる「町並み保存」が、呼ばれております。木曾路の妻籠宿・馬籠宿、岡山の倉敷、そのほか全国に多くの町並み保存がなされつつありますが、近江八幡でも話題となり、保存への運動がすすめられており、古い商家の並ぶ町筋には、土曜・日曜や祝祭日には、カメラをかまえる人々が目につくようになってきました。初めにものべましたように、目まぐるしく移り変わって行く現代社会の中にあって、日本人のふるさとの良さ、そして温かさを求めようとする今日、それぞれの地域社会にある私達の歴史の一つ一つを大切に、保存し、明日への活用を考えるべきではないかと思ひます。

私達は、過去の歴史を知ることには出来ますが、未来の歴史を知ることには出来ません。しかし、未来の歴史をより良く、より豊かにすることは、過去の歴史に対する私達の心がけによって決定するものであると思ひます。

(江南 洋氏提供)